

中学校英語科における評価の具体的方法について - 「話すこと [やり取り]」の評価及び3観点の評価-

言語文化教育サブプログラム

向坪 涼夏

【指導教員】 及川 賢 田子内 健介 武田 ちあき

【キーワード】 英語 思考・判断・表現 主体的に学習に取り組む態度 パフォーマンステスト 評価

1. 課題設定の背景

平成 29 年改訂の中学校学習指導要領(以下、「現行学習指導要領」)が令和 3 年度から全面的に実施されることとなった。予測困難な変化を遂げる現代社会において、社会や人生をよりよくするために自ら思考し、よりよい社会や人生を構築していくための力を身に付けることが重要である。このような力を「生きる力」とし、学校教育は「生きる力」の育成を目指している。今回の改訂を受けて現行学習指導要領では、教科の目標及び内容が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の 3 つの柱で再整理されている。

中学校外国語科(以下、「外国語」は引用文を除き「英語」と表記)においては、互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動を一層重視する観点から、「話すこと」の領域が「話すこと[発表]」と「話すこと[やり取り]」に分けられた。平成 28 年の中央教育審議会の答申では、平成 24 年から全面実施された中学校学習指導要領(以下、「旧学習指導要領」)の課題の 1 つとして、「文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれた授業が行われ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に〈話すこと〉及び〈書くこと〉などの言語活動が十分に行われていないこと」が示されている。文部科学省が発表している「令和元年度英語教育実施状況調査『参考資料』」においても、旧学習指導要領における英語教育の課題として、「中学校で依然として、入試を意識した学習(語彙、文法等)に偏り、言語活動を中心とした授業が十分行われていない」ことが挙げられ、「やり取り」や「即興性」を意識した言語活動が推進されている。

東京都では令和 4 年度から都立の高校入試でスピーキングテスト(ESAT-J)が実施されている。高校入試におけるスピーキングテストの実施が全国に波及するか否かは未だ不確定であるものの、中学校では受験に向けた対策の一環として「話すこと[やり取り]」の能力を高めることがより求められる可能性がある。

来年度から中学校の英語教育に関わる身として、現行学習指導要領の実施を受けて、英語教育の改善のためになされている取り組みについて知見を深めたい。授業とその改善について考えることはすなわち評価について考えることでもある。「『指導と評価の一体化』のための学習評価に

対する参考資料」(国立教育政策研究所 2020)には、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善と評価について、「児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくことが大切である」(下線は筆者)とある。学習評価とは生徒の学習の習熟度を測るものであると同時に、教師の授業に対するフィードバックでもあるため、教師は生徒の学習評価がより良くなるよう指導の改善に努めなければならない。中学校英語科では、4 技能・5 領域を「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の 3 つの観点から評価をしている。課題研究 I では「知識・技能」と「思考・判断・表現」の観点の違いをまとめたが、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」については検討ができなかった。本研究では、3 つの観点のうち、特に「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」について実践例を参考に、英語の授業の実践・改善について検討し、教師としての実践力を高めたい。

2. 「話すこと[やり取り]」に関する取り組みと評価

現行学習指導要領により、英語を使用した「対話的な学び」がより一層推進されることとなった。教職大学院 1 年次、2 年次に行った実地研究では「話すこと[やり取り]」に関する言語活動やパフォーマンステストが行われていることを確認した。言語活動やパフォーマンステストはこれまでの英語教育でも行われてきたが、近年より一層重視されてきている。

表 1 は、文部科学省実施の英語教育実施状況調査(平成 25 年度から平成 27 年度までは「結果(詳細)」、平成 28 年度から令和 4 年までは「集計結果」を参照した)より、授業 1 時間あたりに占める言語活動の時間の割合について、その推移をまとめたものである(令和 2 年度は調査なし)。調査では学年別の結果が示されているが、ここでは 3 学年の合計から平均値を割り出し、数値は全て小数点第 1 位を四捨五入した。また、集計の単位は、令和 3 年度までは「教員数」、令和 4 年度からは「学校数」であるため、数値の直接的な比較はできない。あくまでも値の変化を概観するためのものとして作成した。

この調査での「言語活動」とは、「コミュニケーション

を図る資質・能力を育成することを目指して実施している活動」と定義されており、いわゆるパターンプラクティスのような、言語に対する理解を深めたり、練習したりするような指導とは区別される。

年度ごとの割合を比較すると、特に授業1時間あたりに占める言語活動の割合が、25%以上50%未満であるという回答が年々減少し、50%以上75%未満であるという回答が年々増加している。

表1 授業1時間あたりに占める言語活動の割合の推移

授業(1H)に占める割合	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R3	R4
25%未満	8%	6%	3%	3%	2%	2%	2%	2%	2%
25%以上50%未満	45%	42%	31%	28%	24%	22%	19%	27%	23%
50%以上75%未満	37%	40%	46%	48%	50%	51%	53%	53%	58%
75%以上	11%	12%	20%	22%	24%	26%	26%	18%	16%

文部科学省「英語教育実施状況調査」(H25～R4)より作成

令和4年度の英語教育実施状況調査では、言語活動において、5領域それぞれにかけた時間の割合が調査されている。それによると中学校では、言語活動全体にかかる時間を10としたとき、「話すこと[やり取り]」に当てられる時間は3.07、「話すこと[発表]」に当てられる時間は1.92、「書くこと」に当てられる時間は2.67、「聞くこと」と「読むこと」に当てられる時間は2.34であり、「話すこと[やり取り]」に当てられる時間が最も長い。

現行学習指導要領の実施とともに、言語活動の実施に対する意識がより高まり、多く実施されるようになったのと同時に、言語活動の内容も「話すこと[やり取り]」に注目して行われるようになってきたのではないだろうか。旧学習指導要領の課題として挙げられていた、「言語活動を中心とした授業が十分に行われていない」ことが徐々に改善されているのであろう。

同調査より、パフォーマンステストの実施率について年度ごとの推移を以下にまとめた(表2)。この調査での「パフォーマンステスト」とは『書くこと』『話すこと』の能力を評価するものと定義されている。平成29年度までは、パフォーマンステストについて、「書くこと」「話すこと」の「いずれか」または「両方を含む」実施状況を調査しているが、平成30年度からは①「書くこと」と「話すこと」両方実施、②「書くこと」のみ実施、③「話すこと」のみ実施、のように領域別に調査している。そこで平成30年度以降のデータは、①「書くこと」と「話すこと」両方実施のデータを参照した。

表2 パフォーマンステストの実施率(単位:%)

年度	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R3	R4
単位(%)	93.0	94.2	95.5	95.5	96.5	83.0	86.1	90.5	90.1

文部科学省「英語教育実施状況調査」(H25～R4)より作成

年度によって多少の差があるものの、毎年90%近くという高い割合で「書くこと」「話すこと」についてのパフォーマンステストが実施されている。

パフォーマンステストの実施内容についても調査されており、「スピーキングテスト」と「ライティングテスト」について、その実施回数が見られている(表3)。ここでの「スピーキングテスト」には、音読やあらかじめ決められた台詞を言い合う活動を含まない。「ライティングテスト」は、定期考査時間内での実施も含むが、語彙、語法、文法知識のみを問うような問題や単なる下線部訳は含まない。

「話すこと[やり取り]」の領域が設定されたことを鑑みて、スピーキングテストの内訳にも注目したく、表を色分けた。

表3 令和4年度パフォーマンステストの内容(単位:回)

		第1学年	第2学年	第3学年
スピー キン グテ スト	スピーチ	14087	12508	12630
	プレゼンテーション	8721	11193	10728
	インタビュー (面接・対話等)	15866	15816	15208
	ディスカッション	616	1406	2786
	ディベート	205	537	2521
	その他	1411	1634	1618
スピーキングテスト合計		40906	43094	45491
ライティングテスト		25929	28392	31530

文部科学省「令和4年度公立中学校における英語教育実施状況調査」(p.3)より作成

資料内では特に明記はされていないが、「スピーチ」と「プレゼンテーション」は「話すこと[発表]」を主に測るもの(表内の淡灰色)、「インタビュー」、「ディスカッション」、「ディベート」は「話すこと[やり取り]」を主に測るもの(表内の濃灰色)として分類した。「インタビュー」では、あらかじめどのような質問がなされるのか周知されている場合においては、回答の準備ができるという点で「ディスカッション」や「ディベート」と比較して即興性が低くなる可能性がある。

スピーキングテストの内容のうち、どの学年でも最も実施回数が多いのは「インタビュー(面接・対話等)」であり、次に「スピーチ」「プレゼンテーション」と続いている。これら3つはテストの場面を設定しやすく、「話すこと」の能力を測るテストの中でも取り組みやすいのではないだろうか。一方で全体的に実施回数が少なく、学年ごとの実施回数の差も激しいのが「ディスカッション」と「ディベート」である。ディスカッションやディベートの実施が難しいのは、学習者の言語運用能力に加え、討論のテーマに関する背景知識が必要になるからだと考える。そのためか、学年が上がり、使用できる語彙が増え、テーマへの理解がより深まるにつれて実施回数が増加している。「話すこと」の領域別の実施回数は、「話すこと[やり取り]」が「話すこと[発表]」よりもやや少ない。「話すこと[やり取り]」を測るテストは、即興性が求められる点から、評価の判断が難しいという教師側の負担や、テストのために原稿の用意ができないという生徒側の負担も大きいテスト形式であ

るため、実施の難易度が高い可能性がある。

3. パフォーマンステストの実例

現行学習指導要領の実施とともに、「話すこと[やり取り]」に関する言語活動の充実やパフォーマンステストの実施がなされていることを確認した。

「話すこと[やり取り]」の能力を高めることについて、四日市市教育委員会教育支援課(2018)は、帯活動を活用した段階的な会話練習を継続し、表現を定着させることが英語での会話を活性化させ、「話すこと[やり取り]」の能力を高めることに一定の成果があることを明らかにした。

日々の授業で英語を使用してコミュニケーションを図る姿勢を継続的に育み、その学びが活かされる形でのパフォーマンステストの実施が大切である。

以降ではより具体的なパフォーマンステストの実施方法とその評価について考えたい。以降、「パフォーマンステスト」は原則として「『話すこと[やり取り]』の能力を測るスピーキングテスト」と定義する。その他のテストについては別途表記する。

『英語教育』編集部(2022)は、パフォーマンステストの実例を紹介している。その一部を以下にまとめた。

○小学校での実例

授業での取り組み	単元の中で「お互いが高めあえるやり取りをするにはどうしたらいいのか」という点を意識させる。会話の流れから思考する機会が生まれるように考えて提示する。
目的・場面・状況	「今後の学校生活を高めあうために、お互いのレベルアップにつながるようなやりとりをしよう」。
形式について	生徒3人が話すのを教師が観察。(教師は会話に加わらない)
評価について	「話すこと[やり取り]」の「知識・技能」。教師用のルーブリックを作成。評価内容を記入した紙は生徒に返却する。

奥平明香「話すこと[やり取り]の指導と評価」(pp. 36-37)より作成

○中学校での実例

授業での取り組み	帯活動で「話すこと[やり取り]」に関する活動(下記①②③)を行う。それらを一定期間行った後に、パフォーマンステストを実施。
目的・場面・状況	①生徒同士の英問英答、②1分間チャット、③語彙の説明に基づく。
形式について	教師と生徒のやり取り。教師2名で担当し、1人は通常授業、もう1人がテスト担当など。
評価について	「話すこと[やり取り]」の「思考・判断・表現」。テスト前にテストの内容、評価基準、日程が書かれたものを配布。テスト当日は評価シートを配布。

宮崎太樹「話すこと[やり取り]×思考・判断・表現のテストと評価」(pp. 54-55)より作成

○高校での実例

授業での取り組み	言語活動を通してロールプレイを実施する。自分の考えを表明する、論拠を述べる、相手の考えに反応する、相手から同意を得るといった表現を示す。
目的・場面・状況	「国内の小旅行の交通手段の決定」のためのロールプレイ。
形式について	教師との対話形式。1人当たり2分。教師2名で担当。
評価について	「話すこと[やり取り]」の「知識・技能」と「思考・判断・表現」。

千菊基司「教師と生徒間でのロールプレイを用いた話すこと[やり取り]の評価」(pp. 68-69)より作成

「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」にもパフォーマンステスト実施の参考例が示されており、同様の形式でまとめた。

授業での取り組み	単元を通して毎時間の冒頭に「話すこと[やり取り]」の言語活動を行う。1~3課の授業を進めた後に、パフォーマンステストが行われる。これまでの授業で段階を踏んで「英文を読み、考えや感じたことを理由とともに英文を引用するなどしながら伝えあう」練習をしている。
目的・場面・状況	「AIの進歩と私たちの生活」に関する記事を読み、伝え合う。
形式について	生徒2人のやり取りまたは生徒1人とALTのやり取りなど。
評価について	「話すこと[やり取り]」の「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」。

前述の実例、参考例にはルーブリックや評価基準、生徒のやり取りの例文と評価の具体例(abbなど)が示されたものもあるが紙面の都合上割愛した。

実例をいくつか参照し分類を試みた結果、「授業での取り組み」「目的・場面・状況」「形式」「評価」という4つの類似した特徴を見出した。単元の指導や帯活動、言語活動を通して表現を身に付けさせ、それを使用して「やり取り」を行っている。パフォーマンステストとは授業中に積み上げてきた能力を適切に確認する場だと再認識した。

パフォーマンステストの評価について、「知識・技能」の観点では主に英文の正確さ、「思考・判断・表現」の観点では主に英文の適切さを測っている。「主体的に学習に取り組む態度」は基本的に「思考・判断・表現」と一体で評価する。「知識・技能」については、パフォーマンステストにおいても比較的正確に評価ができそうである。どこでエラーが起こっているのか判断しやすいからだ。一方で「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」の判断はどのように行えばよいのだろうか。「思考・判断・表現」の評価基準は「伝えあっている」「提案している」などの文言で示されることが多い。また、「主体的に学習に取り組む態度」の評価基準は、それに加えて「しようとしてる」という文言で示されることが多い。この2つ

の観点は一体的に評価されることから評価基準が似ている。「伝え合う」様子や「伝え合おうとしている」様子などを教師の主観に頼らずに測ることはできるだろうか。ルーブリックやCAN-DOリスト等を作成し、評価基準を示すことはできるものの、生徒によって変化する発話を瞬時に判断し、適切に評価するのは難しい。

4. インタビュー調査

4-1 調査の概要

パフォーマンステストの評価に関する疑問について、現場の教員がどのようにパフォーマンステストを行い評価しているか学ぶことは、その解決の糸口になり得るだろう。そこでより身近なパフォーマンステストの実施例をまとめるとともに、「話すこと[やり取り]」に関する評価について学ぶことを目的として、英語教師へのインタビュー調査を行った。

インタビューの回答者は11名の英語教員である。調査は対面もしくはオンライン上で行い、インタビューにかかった時間は1人当たり約1時間である。内容は「パフォーマンステストの実施について」と「評価について」を主とした最大7つの質問である。

導入	パフォーマンステストの実施と内容等について
Q1	パフォーマンステストをするために、授業ではどんな取り組みをしていますか。
Q2	パフォーマンステストで生徒の「話すこと(やり取り)」を正確に測り、評価できていると思いますか。
Q3	はい→ 現在行っているテストの詳細について教えてください。
Q4	いいえ→ 先生方の考える理想のテストについて教えてください。
Q5	「話すこと(やり取り)」における「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価の例(ルーブリック等)
Q6	「話すこと(やり取り)」の「思考力・判断力・表現力」または「主体的に学びに向かう力」を育むために授業で何をしていますか。
Q7	その他、評価に関する思いや悩みなど、もしなにかあればお願いします。

図1 インタビューの質問内容

全ての質問に答えることを必須とはせず、関連する内容について自由に話してもらった。そのため質問によっては十分なデータが集められていないものもある。

表4 インタビュー調査回答者の属性について

学校種	高校	小学校	中学校	中学校	中学校
教員歴	～4年	5年～	～4年	～4年	～4年
実施日	2023/10	2023/10	2023/11	2023/11	2023/11
小学校	小学校	小学校	中学校	中学校	中学校
～4年	5年～	5年～	5年～	～4年	5年～
2023/11	2023/11	2023/11	2023/11	2023/12	2023/12

回答者は小学校、中学校、高校の現職教員で、調査期間

は令和5年10月から令和5年12月までである。回答者の教員歴については、5年未満/以上の2つに区分した。

4-2 結果

インタビューの回答をもとに、パフォーマンステストの実施例や、評価に関する取り組みをまとめた。なお、インタビューの内容は、内容を分かりやすくするため意味の変わらない範囲で語彙や表現の修正・補足を行っている。

導入に関する回答

回答を踏まえ、パフォーマンステストの実施の方法を「実施時期(頻度)」「実施教員」「実施形式」「実施内容(範囲)」に分類した。

○実施時期(頻度)

パフォーマンステストの実施頻度で最も回答が多かったのは「学期末(毎学期に1回の回答も含む)」である。次に、「単元の終わりごと(複数単元を含む)」、そして「1年間に1、2回」と続く。その他の回答として、「できれば教科書の単元毎に行いたい、現実的に難しいため複数単元をまとめて行う」、「定期テストの時期と重ならないように、定期テストの間隔に合わせて実施する」がある。

○実施教員

パフォーマンステストを実施・評価する教員について、約7割が、「ALTがパフォーマンステスト実施する」と回答し、約半数が「ALTがパフォーマンステストを実施しその評価をする」と回答した。他にも「ALTとJETで生徒を分担する」場合や、「テストの実施はALTで、隣でJETが評価する」、「知識・技能についてはJETが、思考・判断・表現についてはALTが評価する」といった例も挙げられた。「ALTが不在時にパフォーマンステストを実施しなければならない場合もあるため全てJETが実施し評価する」という回答もあった。

○実施形式

パフォーマンステストの実施形式は「ALT(場合によってはJET)からの質問に答える」という回答が最も多かった。これは表3におけるインタビューに近い内容であろう。他に、「発表に加えてやり取りをする」や「ディベートを行う」という例もある。

○実施内容(範囲)

パフォーマンステストの内容は「該当する単元で学習した内容についてのやり取り」という回答が最も多い。「目的・場面・状況」もそれに基づいている。

やり取りの中身は、大きく2種類に分かれており、①予測可能なもの(あらかじめ決められた内容や、単元で学習した内容について)と、②予測不可能なもの(これまでに習った表現等を使用した内容、いわゆる即興でのやり取り)がある。評価とも関連しており、①は「知識・技能」の観点、②は「思考・判断・表現」の観点で評価するという回答が多かった。

Q1に関する回答

パフォーマンステストに向けた授業内での取り組みにつ

いて最も多かった回答は「テストの実施前にパフォーマンステストに関する事前説明をし、ルーブリック等を配布している」である。「評価について生徒に納得してもらいたい」という声が多かった。その他、「話すこと[やり取り]」に関する練習の機会として、「帯活動を通して自由に話す時間(いわゆるフリートーク、フリーチャットなど)を設ける」という回答が多かった。他に、「単元の計画を生徒に示しパフォーマンステストがあることを告知したうえで、ペアやグループで練習させたりリハーサルさせたりする機会を設ける」という例も挙げられた。一方で、「パフォーマンステストに向けた準備をさせることは、『即興』でのやり取りという観点において不適切ではないか」という問題点も挙げられた。

Q2~4 に関する回答(一部抜粋、修正)

Q2では生徒の発話をどのように評価するのかという視点から質問を設定したが、集まった回答を総合的に判断した結果、「現在行っているパフォーマンステストで改善したい部分」と捉え直してまとめた。Q3、Q4も同様である。

- ・パフォーマンステストを行うことで生徒は「英語が通じた」という体験をすることができ、英語学習への動機付けになっているため有用である。單元ごとにパフォーマンステストを実施したいが、その時間がないのが現状である。
- ・パフォーマンステストの実施時間を(授業の)1時間分とすると、生徒1人当たりの時間は約1分、場合によっては40秒になるときもある。短い時間で生徒の能力を正確に測ることができているのだろうか。
- ・(普段は話せているが)パフォーマンステストの当日にたまたま上手くできなかった生徒への配慮をどうするか。
- ・(生徒に配慮し)ALTではなくJETが評価したいが、パフォーマンステストをする廊下と待機中の教室に教師がそれぞれいる必要があり、難しい。

テストの実施時間と環境について疑問の声がいくつか挙げられた。特に、「(パフォーマンステスト中に)1人1人を見る時間がない」という回答が最も多かった。

Q5 に関する回答

評価の項目は回答者によって異なることが多く、まとめることができなかった。そこで生徒に配布されるルーブリックの一部なども参考に、評価の基準になる項目を大きく3つに分類した。

○英語の技能に関するもの(流暢さ、強弱、発音など、いわゆる「正確さ」について)

○発話の内容に関するもの(内容が考えられているか、論理性があるか、質問を理解しているかなど、いわゆる「適切さ」について)

○主体性に関するもの(態度、原稿を見ない、会話をしようとしている姿など)

それぞれ上から順番に、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の観点と一致していることが多い。一度にこれら全てを測るのではなくパフォーマンステスト毎に評価の項目は変化している。

評価(採点)については、「(ルーブリックに沿って)その場で判断する」という回答が最も多かった。他には「録画をし、後に動画を見ながら評価しているがそれだと時間がかかってしまう」や「事前にALTと評価の基準を合わせたのが打ち合わせの時間が取れない」など、評価の項目自体ではなく採点の方法や点数の付け方に対して課題を感じる回答が多かった。

Q6 に関する回答(一部抜粋、修正)

○「話すこと[やり取り]」について、「思考力・判断力・表現力」を育むために授業中に行っていること

- ・即興性を測るテストの際は、あえてモデルを示しすぎないようにすることで、生徒に伝え方を考えさせている。
- ・覚えたことを発表するのでは「思考・判断・表現」として評価できないのではないかと。授業中に「思考力・判断力・表現力」を育むような課題を出していないのなら、パフォーマンステストでそれら进行评估することはできない。
- ・前の単元や既習内容について復習させ、それを使用しやり取りを即興で行うことで「思考力・判断力・表現力」を育んでいる。
- ・帯活動でテーマに沿って質問を考えさせる活動をしている。その後に教師との即興でのインタラクションもあり、それが思考力を育んでいるのではないかと。また、帯活動で生徒のエラーに対してフィードバックを行い、それを周りの生徒が学ぶことによって表現力を鍛えている。

○「話すこと[やり取り]」について、「主体的に学びに向かう力」を育むために授業中に行っていること(この項目は「話すこと[やり取り]」以外の領域の評価に関する回答も含んでいる。)

- ・授業での練習を通して課題を発見し、それを基に次の目標を生徒に決めさせている。評定に入るのは最後に行うパフォーマンステストの結果だが、その途中で課題を見つけ学習を調整する姿を見取っている。
- ・授業中の観察から、単元の学習に見取った伸びを見る。机間指導などを通して生徒の様子を見取りメモする。
- ・振り返りシートが評価に関わることを生徒に伝え、しっかりと書かせている。授業中の発言だけでは見とれない部分を、振り返りシートで見取っている。
- ・基本的には「思考・判断・表現」と連動しているが、生徒が頑張っている部分、テストの点数の推移などを見取り、加味して評価を上げることがある。「主体的に学習に取り組む態度」では生徒の頑張りを見取りたい。
- ・ノートを提出させ評価している。「ノートは評価に入れるべきではない」と言われているが、ノート进行评估すると生徒に伝えることで、授業中にノートをとる動機付けになっている部分もある。

○「主体的に学びに向かう力」の評価に対する疑問

- ・教師の主観による評価が多い。
- ・判断の材料が少なく評価しづらい。
- ・基本的に全員A評価でもいいのではないかと。
- ・継続する力をどのように育むかわからない。子どもが自ら学ぶ姿勢を育てたいが、(教師の指導の外で)ある日自然と学んでいることがある。

話すこと[やり取り]の「思考力・判断力・表現力」を

身に付けさせるのは難しいという回答がある一方で、既習事項を使用した即興でのやり取りや、会話を考えさせるような活動を行うことでそれらを育むという回答もある。

「主体的に学びに向かう力」の育成に関する回答は「思考力・判断力・表現力」の育成に関する回答よりも多く、評価への疑問の声も多く挙げられた。「(いわゆる「主体性」を)どのように育むのか分からない」「数字で(評定を)出すのが難しい」という回答もあり、現場の英語教員の迷いが見受けられた。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、「振り返りシート等を活用し、生徒が学習を調整する姿を評価したい」という考えがある一方で、「現状として、提出物の提出率で見取る」という回答も多かった。「提出物を評価に入れることに疑問を抱くものの、生徒の学習意欲を高めるため、また、取り組んでいることに意味を持たせたいという考えから評価の材料にしている」という回答もあった。

Q7 その他の回答について(一部抜粋、修正)

パフォーマンステストや「話すこと[やり取り]」に関わらず、評価に対する意見を聞き取り、まとめた。

- ・評価の基準を教師同士で合わせることが難しい。
- ・言語活動の時間をもっと取りたいが教科書の内容を指導するので精一杯である。
- ・そもそも授業への準備時間が少ない。
- ・絶対評価と言いつつ、受験に向けて、評価のバランスの調整をしなければならない。
- ・準備をする時間はなかなか取れないが、パフォーマンステストはALTを信頼して任せることも大切だと思う。
- ・3観点のみでは(評価の範囲が広く)、生徒はどこができていないのかなどを知るの難しい。
- ・(上記と反対して)通知表の評価は3観点のみで、なぜそのような評価になったのか説明できれば良いことから、5領域全てを評価することはしていない。
- ・「評定のため」の評価にならないようにしたい。
- ・評価の仕方、基準が分からず、パフォーマンステストが行いづらい。「やり取り」も、教科書の内容を進めながらだと時間が取れず、練習できていない。
- ・「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」は一体して評価するとされるが、一方がペーパーテスト、一方が提出物で見ているため実際は一体ではない。
- ・ルーブリックは、生徒が理解できる文章で、測りたいことを測れるようなものを作成するのが難しい。授業での練習が結果としてパフォーマンステストに活きるようにしたいが難しい。

最も多かった回答は「パフォーマンステストを実施する時間が少ない」であった。評価に対する理想と現実の乖離、学校現場の実態に関する回答も多く見られた。

4-3 成果及び考察

インタビュー調査を通してパフォーマンステストの実施方法、評価の項目についての知見を深めることができた。特に「思考・判断・表現」の評価については、授業中にそのような力をどのように育成するかについての実践例を得

たとともに、パフォーマンステストの評価における「知識・技能」の観点との違いについての考えが深まった。一方で「主体的に学習に取り組む態度」については「話すこと[やり取り]」の領域に限らず評価が難しい項目として挙げられたことから、新たな課題の発見となった。

5. アンケート調査

5-1 調査の概要

パフォーマンステストの具体的な実施方法と評価に対する課題について、現状をより一般化して理解するため、インタビュー調査で得た回答を基に、より多くの教師に向けたアンケート調査を行うこととした。

調査は全てオンライン上で行った。調査期間は令和5年12月末から令和6年1月中旬である。回答者は小学校教諭が11名、中学校教諭が17名、高校教諭が16名の総計44名で、回答者の教員歴は、1年目が3名、2年目が4名、3年目が7名、4年目が10名、5年以上10未満は15名、10年以上15年未満は1名、15年以上20年未満が4名である。

属性について	校種 教員歴
分岐	パフォーマンステストを実施していますか。 ○発表のみ実施→質問5へ ○実施しない→質問6へ
質問1	パフォーマンステスト「話すこと[やり取り]」の実施頻度はどれくらいですか。
質問2	パフォーマンステスト「話すこと[やり取り]」はどのように実施しますか。(複数回答可)
質問3	パフォーマンステスト「話すこと[やり取り]」はどのような形式で行いますか。(複数回答可)
質問4	パフォーマンステスト「話すこと[やり取り]」のテスト範囲はどれですか。(複数回答可)
質問5	評価基準表(ルーブリック)等の配布はしていますか。
質問6	年間を通して、15項目全てを評価していますか。
質問7	年間を通して、評価しづらい項目はありますか。(複数選択可)
	質問7に関する自由記述
質問8	「主体的に学習に取り組む態度」はどのように見取りますか。
	その他の自由記述

図2 アンケート設問

パフォーマンステストについては、インタビュー調査の結果から分類した4点の実施方法(「実施時期(頻度)」「実施教員」「実施形式」「実施内容(範囲)」)と、ルーブリックの配布について調査することとした。回答の簡便さを考慮し質問や選択肢の数を制限したことから、評価項目の具体例や評価基準については調査しなかった。

また評価に関しては、評定の出し方と、「主体的に学習に取り組む態度」の測り方についての回答を得ることを目

的とした。インタビュー調査で評定に関する回答が多く、3 観点 5 領域全てを見切れていないという現状を踏まえ、このような質問を設定した。

アンケートの質問に入る前に、パフォーマンステストの実施の有無について聞き、回答によって次の質問が分岐するようにした。「話すこと[発表]」については調査しておらず、初めの回答で「話すこと[発表]」のパフォーマンステストのみ実施、またはパフォーマンステストを実施していないと回答した場合は、次の質問がそれぞれ質問 5、質問 6 に続くように設定した。

質問 1 から質問 4 までは、「話すこと[やり取り]」を測るパフォーマンステストに関する質問である(「話すこと[発表]」は含まない)。

質問 5 の評価基準表(ルーブリック)等とは、「児童生徒が目標とするもの(「一なら A、一なら B」という評価の基準が示されたものや「一ができる」等といったテストのゴールが示されたプリント等)」を含む。

質問 6 の「15 項目」とは、4 技能 5 領域と 3 観点を合わせた計 15 項目のことを指す。「評価」とは評定を付ける際の評価(通知表に示す数字を算出するための材料となるもの)を指す。

5-2 結果

表 5 パフォーマンステストの実施について

	実施なし	発表のみ	やり取りのみ	両方実施	合計
回答数(人)	6	13	0	25	44
割合	13.6%	29.5%	0.0%	56.8%	

本調査で「話すこと[やり取り]」に関するパフォーマンステストを実施すると回答したのは 25 名であった。よって問 1 から問 4 については 25 名の回答を基にしている。

表 6 (質問 1)パフォーマンステストの実施頻度

頻度	多	・	・	・	少	
	教科書の 単元末ごと	定期テスト毎	学期に 1 回	年に 1,2 回	合計	
回答数(人)	1	1	18	5	25	
割合	4.0%	4.0%	72.0%	20.0%		

ここでは「教科書の単元末ごと」を学期に 3 回程度、「定期テスト毎」を学期に 2 回程度と想定して調査したが、質問文にはそれが含まれていない。それゆえ回答者によっては質問の捉え方が異なってしまった可能性もある。

表 7 (質問 2)パフォーマンステストの実施相手

	児童生徒は ALT とやり取り をする	児童生徒は JET とやり取り をする	児童生徒を JET と ALT で 分担する	児童生徒同士 のやり取りを親 察または録画
回答数(件)	21	1	4	9
割合	84.0%	4.0%	16.0%	36.0%

複数回答が可能であるため、回答数の合計は回答者の合計(25 名)にはならない。割合は、回答者 25 名と回答件数から算出している(以下同様)。

表 8 (質問 3)パフォーマンステストの実施形式

	面接 (児童生徒は相手 からの質問に答える)	インタビュー (児童生徒 が相手に質問する)	やり取り (児童生徒は 相手の質問に答え、自分 も相手に質問する)
回答数(件)	15	7	18
割合	60.0%	28.0%	72.0%

インタビュー調査では、ALT の質問に答える(ここでは「面接形式」と表した)という回答がほとんどを占めたが、アンケート調査では「やり取り」の実施率が若干上回った。

表 9 (質問 4)パフォーマンステストの範囲

	該当する単元等で 学習したこと	以前に学習したこと (定期テスト等の試験範囲 より以前のもの)	初めて学習すること (授業では触れていない、 即興性を問うものや「応用 問題」等)
回答数(件)	18	13	2
割合	72.0%	52.0%	8.0%

インタビュー調査では「単元で学習したこと」は「知識・技能」、「以前に学習したこと」は「思考・判断・表現」を測るものとして互いに関連していたがアンケートの調査では評価と関連させる質問を行わなかったため、それに関するデータは得られていない。

表 10 (質問 5)ルーブリックの配布について

	パフォーマンステストの 当日より前にルーブリックを公開する	パフォーマンステストの 当日にルーブリックを 公開する	ルーブリックを公開 していない	その他
回答数(件)	24	2	11	1
割合	63.2%	5.3%	28.9%	2.6%

質問 5 は「話すこと[発表]」のパフォーマンステストも含んでいる。回答者は 38 名で、割合もそこから算出した。「その他」の回答は、「領域([やり取り]または[発表])」によってルーブリック公開の有無が異なる」であった。

質問 6 以降は評価に関する質問である。「話すこと[やり取り]」以外の領域も含んでいる。

表 11 (質問 6)15 項目の評価について

	はい (3 観点を領域ごとに 分けて評価している)	いいえ (3 観点を領域ごとに 分けて評価していない)	その他	合計
回答数(人)	15	28	1	44
割合	34.1%	63.6%	2.3%	

「その他」の回答は「重なる観点を合わせて評価している」であった。「いいえ」の回答が多いことから、評定をつける際、評価の判断材料を領域ごとに分けていないことが示されている。質問 6 に加え、質問 7 では 5 領域 3 観点のうち、年間を通して評価しづらい項目について調査した。

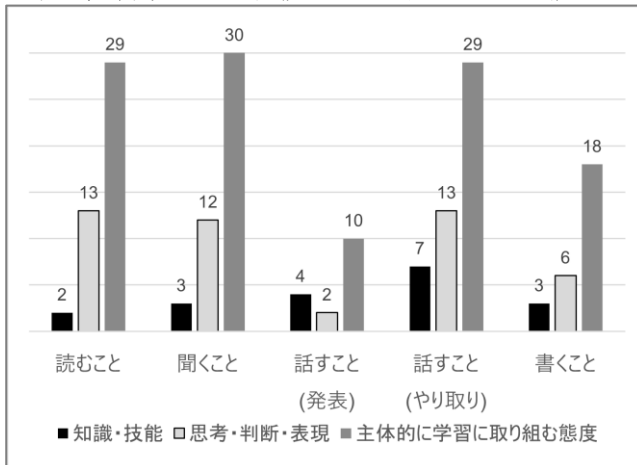


図 3 (質問 7) 評価しづらい項目について

5 領域とも「主体的に学習に取り組む態度」の評価がし

づらいという回答が最も多い。質問 7 に関する自由記述の内容も同様である。「主体的に学習に取り組む態度」について記述されたものをいくつか抜粋する。

- ・(評価の観点)それぞれが独立しておらず関連し合っていることから、項目毎の評価が難しい。
- ・「思考・判断・表現」と一体的に評価すると実態と馴染まない場合が多く困ることがある。
- ・インプット活動では(アウトプット活動よりも)「粘り強さ」や「自己調整力」を把握しにくい。
- ・主体性を数値化できない。
- ・全体的に生徒間で差がつきにくく、評価しづらい。

インタビュー調査では、評価に関して「主体的に学習に取り組む態度」の評価をすることが難しい、という回答が多かった。そこでアンケート調査では「主体的に学習に取り組む態度」が実際にどのような方法で評価されているのかを確認することとした。インタビュー調査での回答を参考に、6つの項目をあらかじめ作成した(図4中の6項目、淡灰色部分)。それらに当てはまらない場合は項目を増やす形で自由回答とした(図4中の4項目、濃灰色部分)。

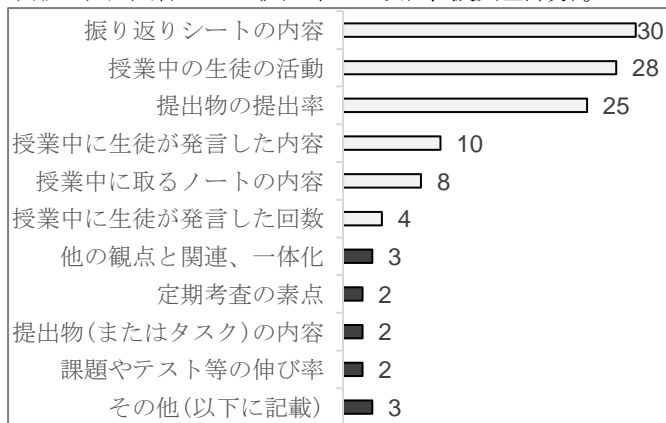


図4 (質問8)「主体的に学習に取り組む態度」の見取り方「その他」の回答は以下3点である。

- ・パフォーマンステスト
- ・生徒とのやり取り
- ・定期考査後に記入する反省カードの内容

振り返りシートを記入させ、その内容を評価するという形が多く取られていることが分かる。またそれと同等に生徒の活動を日々観察し評価しているという回答が多かった。

5-3 成果及び考察

アンケートの調査の結果はインタビュー調査の回答と類似するものとなった。パフォーマンステストの実施について、また「主体的に学習に取り組む態度」に対する評価の見取り方や評価方法に関しても、総じて同様の結果が見られ、現状を認識することができた。

インタビュー調査やアンケート調査を進めた結果、現場の教師が「主体的に学習に取り組む態度」の評価について迷っているという結論を得た。

「主体的に学習に取り組む態度」とは何か。「『指導と評価の一体化』のための学習評価に対する参考資料」では①粘り強い取組を行おうとしている側面と②自らの学習を

調整しようとする側面の2つが示されている。

この2点について石井(2021)は、「これまでの『関心・意欲・態度』の評価は、本来は目標というより教師の手がかりとして生かすべき子どものやる気(「入口の情意」)を、形成的評価ではなく『評定』しようとしている」ことを問題とし、改訂された観点について、「単に継続的なやる気(側面①)を認め励ますだけでなく、教科として意味ある学びへの向かい方(側面②)ができていくかどうかという、『出口の情意』を評価していく方向性が見て取れる」と述べている。

つまり「主体的に学習に取り組む態度」とは、旧学習指導要領で測られてきた、授業に対するやる気や積極性を評価するものではない。本研究の調査から、「主体的に学習に取り組む態度」が言葉通り「態度」を示しているわけではないという理解は広まっていると推測される。しかしながら、「学びに向かう態度」をどのように測るのか、その具体的な方法はつかみづらく、実態と合致していないという現状がある。

6. 調査の課題

本研究では「話すこと[やり取り]」におけるパフォーマンステストの実施状況と、それに関する評価の実態について調査し、類似点や課題を見出した。得られた調査結果は、回答者数が少ないこと、教員歴や校種を反映した結果が示せなかったこと、調査において回答に偏りが生じた可能性が否めないことなどを考慮する必要があり、英語教育の一般的な実態を示しているとは言い難い。

しかし、身近な実践例を学ぶことは私自身の教師としての力量を高める上で有意義であると認識している。

本研究で検証できなかったことについては今後自身の課題としたい。

7. 主な参考文献

- 石井英真(2021). 「『主体的に学習に取り組む態度』の“2つの側面”を紐解く」『授業力&学級経営力』. 141, 12-17. 明治図書出版
- 『英語教育』編集部(2022). 『英語教育 2022年8月別冊 新課程対応テスト・評価のアップデート・マニュアル』. 大修館書店.
- 国立政策研究所(2020). 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に対する参考資料』.(中学校 外国語)
- 中央教育審議会(2016). 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」[12. 外国語]. (pp. 193-205)
- 文部科学省. 『英語教育実施状況調査』.
- 四日市市教育委員会教育支援課(2018). 「中学校外国語科における「話すこと[やり取り]」の能力を高める研究 ースキット作りを手がかりに英語での会話を活性化させるためにー」. (https://www.yokkaichi.ed.jp/e-center/nc3/htdocs/?action=common_download_main&upload_id=4373)